

M色のS景

三浦俊彦





M色のS景 (エムイロノエスケイ)



著者 三浦俊彦

一九九九年 四月二六日 初版印刷
一九九九年 五月六日 初版発行

発行者 清水勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二二

☎〇三―三四〇四―八六一一 (編集)

〇三―三四〇四―一二〇一 (営業)

振替口座 〇〇―〇〇―七一〇八〇二

カバーフォーマット 菊地信義

表紙デザイン 栗津潔

本文組版 有限会社メディア・ファクトリー
印刷・製本 大日本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

¥600

©1999 Printed in Japan

ISBN4-309-40580-0

河出文庫

エムイロノエスケイ
M色のS景

三浦俊彦

目次

M色のS景

オクトパ・バイブレーション

これは餡パンではない

枯野をただようオブジェ

解説

湯山玲子
栗

七

七

一四三

三二

栗

M 色の S 景

M 色の S 景

脳の真ん中に愛をじつと指さしてみた。愛。…あるある。しっかりと在る。部屋を暗くし、蠟燭を灯して、床に結跏趺坐し、瞑目しつつ私は頭を抱えて凝固していた。

自分の運命くらい、自分で立派に窮地に陥れてみせる。

愛。今夜じゅうに編み出さなくては……人生に仇討ちを果たせるような愛の寓意を。愛。確かに愛に思考を混ぜると危ない。化学反応を起こして誘爆しかねない。だけどポテトチップを一つでやめておけと言われても無理なのと同じ。愛、こればかりは。なにしろ愛だから。愛。そりゃね。愛を問うことは問いを愛すること以上の収穫をもたらすのだろうか。というふうにも絶えず疑問形で愛の寓意を表明しつつづけられね。なにせ質問ってものは。いかにも攻勢だし。なんだかすごく革新的だし。とことんそれだけでいければ、愛といえどもついには。さしもの愛もいずれは。うん……。愛……。愛……。愛……。でも愛。だけど愛。愛。あ・い。

ふん……。マこうやって愛愛愛と執拗に呟いて、愛ってコトバならびにイメージをわれながら馬ッ鹿馬鹿しいものにしておいてと。これできつと冷静に、鋭い質問を発しはじめることができるのだわ、もう動いてもダイジョウブなのだわ、さて——と、思つたらてきめんに。

林の南端の電話。が鳴っているのがこの部屋にまでかすかに聞こえてきている。あらま。運の悪い日だわ。ふだんなら窓を閉めていればまず聞こえるものではないんだけれど。今夜はなぜか表の通りにも全然車が走っておらずいつになく静かで、却って些細な物音が際立ち、さつきから林の虫や小動物の声がりアルに響いてきていて気にはなつていたのだ。しかしあの一歩遠くの電話の音が聞こえてしまうとは。しかし聞こえてしまったからには仕方がない。私は黙坐をほどいてのろのろと立ち上がり、蠟燭を吹き消して、電話が鳴りやむことを期待しながらゆつくりとドアをあけて外に出た。

月夜。林を歩いてつづきる間に電話のベルは七十六回鳴った。クヌギの樹の根もとに辿りついてやれやれとしゃがみこんでみると、鳴り続けているこの黒い旧式のダイヤル電話に、四十センチはある紫色のトカゲがもたれかかつて受話器に噛みついていた。一瞬ぎよつとしたけれど、

「この、ばか」

トカゲの重い横腹を押しこくってなんとか追い払う。未練がましく振り返りながら立ち去るトカゲについ済まないわねというような感情を覚えてしまいつつ、八十二回めの

催促の途中で受話器を取り上げたたん、

「先生ですかっ。どうも夜分おそれいます。僕です」

「ああ……」心臓に疼痛が走ったような気がした。

「いや、申し訳ありません夜遅く。でもどうしてもお話ししなければならぬことがありますので、本当に……」

いま最も話したくない相手だ。一番目障りな相手。さつきせっかく調息して愛を脱臼させといたのに、免疫を練り上げたのに、この声を聞くと途端に愛が馬鹿らしいものじやなくなっちゃう……！「ええとね、実はいまちよつと忙しいんだけど。あなたにも伝えたくはただけど、私今夜じゆうに……」

「あ、それは存じてます。いやその、実はそれだからこそ他ならぬいまお電話したわけなんです」

「へ？ どういう意味かしら？」

「ちようどお忙しい最中に僕のこの話を聞いていただきたかったですよ。いや別に緊急の話じゃないんですが、だからこそ忙しいときにあえて邪魔するということの意味があるわけで。で今夜は先生の御都合がちようどこういうことで絶好だと思ひまして……」彼はわざとらしく一呼吸置いて、「つまりいずれ長々と御相談申しあげねばならないことだったんですが、なにせもつぱら僕の一身上のことですから、先生のお時間をいただくのは原則として申し訳ない。しかしお話しせねばならない。とすれば、先生に、この

ことが僕にとってどれほど重要かを認識していただける時を狙わなければ、長々と御相談申しあげるのは失礼だと考えたわけなのです」

またこの子の理屈が始まったわ。私は内心げっそりした。しかし私たちの関係は確かに多量の理屈を必要としているのだから……ここで私が一方的に理屈をサボったりすれば、次に顔を合わせたときの会話に皺寄せがいつて、事の進行がさらに面倒なものになることは目に見えている。観念が滞るぶん行為で頑張らなくてはならなくなる。私は舌なめずりをして辛抱強く受話器を握り直した。

「ですから、このちようどまさにお忙しいときであるにもかかわらずあえて僕が先生のお邪魔をせざるをえないということで、先生にはこの話の深刻さがおわかりになってもらえるだろうと、でそれだけ真剣に聞いて下さるだろうと、だから長々と御相談申し上げてもお腹立ちさせることもなく却って礼に叶うだろうと」

「相変わらず微妙な論理構造を持った理屈だわね。まあいいわ。で、」私は樹上の照明に斑まだらに照らされたあれはたぶんシロスジカミキリの交尾を見上げながら言った。「何なのかしらその相談とやらは」

「ええ、実は僕、ことしじゅうに結婚することになりそうで、それで」

私はのけぞった。

「お？ これはこれは、結婚とはまた、大きく出たわね」

「大きく出たって先生、本当なんですから」

「ふむ……、しかし結婚とは考えたな……」

私は実際不意を突かれていた。この子……この男……今度は何を企んでいるのか……。

「とにかく本当に結婚するわけで、僕」

「そう。まあともあれ、おめでどう」

「ありがとうございます」

私はしかし意外に落ち着いていた。この子が結婚するはずはない、と思った。この謎を解いて、先回りしてぎゃふんと言わせてやる。

「で、そこで御相談なんですが、困ったことがあるのです。実は……」

「待って！ 言ってはだめ！」

眼前の相手を押しとどめるかのように私は思わず掌を突き出して、大声を出した。

「言ってはだめよ、待ってて……」

この子にはつい一週間前に負けを喫しているのだ。私のほんの些細なしぐさから、心の弱みを確かに勘づかれてしまった。あのときの彼の目はそれを明らかに示していた。いつものように私のハイヒールに踏みつけられるふりをしながら、目が勝ち誇っていた。外見上は私が彼に屈辱を与えながら、心理的に私は不思議な屈辱を味わっていたのだ。ただ決して不快な屈辱ではなかったが……。

「まだ言っちゃだめよ。当ててやるんだから」

「どうしたんです先生今夜は。むきになっちゃって」

私は深呼吸して推理力を集中させる。結婚するだつて？ 全くぎよつとさせる。しかもおつかぶせるように、実は困ったことがあるのですと二重の謎をかけてきた。これは挑戦を受けねばなるまい。いよいよ私たちの関係も正念場だという気がする。もう一度深呼吸して、受話器を握り直して立ち上がって、目の前で交^まわっているカミキリムシの上のやつをつまんで、連なつたまま樹肌から離れた二つをむこうの闇の中に放り投げた。まだ気が散る。しかしここはもたもたせず、毅然と――。

「ウン、大体見当がつくわ。あなたは最初『結婚することになりそうです』と言つたわね。純粹な意思表明ではなかつたわよね。ということは、不本意な結婚ということなんだ。あなたは結婚したくないのだけれど、しなければならいってわけね。おおかた女に子どもができてしまったとか、あなたにしちゃ大それてるけど、そういうことでしよう。どういう人なの、その相手の女のひとは」

「いや、僕は彼女を愛しているし、彼女も僕を愛しています」

「ふふーん」一瞬耳がかとと熱くなつたが、私はまだ樂觀していた。この程度の謎なら、そう手こずることもないはず。この男と愛しあっている女なんて居つこないが、ではこの言い方はどういう意味なのかだが――

「じゃあまあ、こういうことかしらね。お互い愛しあつてはいるのだけれど、障害がある。というか妨害がある。問題はその妨害が何かということ……」

「それは人間じゃありませんよ。第三者が僕たちの結婚に反対しているってことはない

です。恋仇もないし、ふたりの両親とも僕らが近く結婚するだろうことを期待というか、待望しています」

私の頭の中でびき、と何かの感情がひび割れかけた。頼みもしないのにむこうからヒントを出してきたことに、私は腹を立てるといふより危機感を覚えた。せっかく話を合わすふりをしているのに、それがふりではなくなってしまうのではないか。しかも恋仇がないだって？ この私にむかつてしゃあしゃあとよくもまあ。どうしたらそういう発想が出てくるのだろう。私はいつのまにか厄介な立場に追い込まれていることに気がつきはじめる。小さな蛾が私の顎のあたり、愚弄するようにまとわりついてくる。

「……じゃどうせお金ね。まだ踏みきる余裕がないってことね」

「いや、それは問題ありません」

「じゃふたりのどっちかが外国にでも住まなきゃならない事情があるとか。あなたについてそんな話は聞いてないわよね。彼女の方にそういう事情があつてあなたは応ずるのが難しい、と……」

「そういう事実もあります」

「……」蚊が耳もとで唸っている。私は次第にいらいらしはじめた。喋っているうちに、彼が本当に結婚するような気がしてきた。不用意に話を合わせているうちに、それがだんだん事実と化してゆくような。「彼女」なるものが実在してくるような。……こう苛立っては、いつもこの心理戦は負けなのだ。蒸し暑いくらいの夜なのに、不吉な予